16-17世紀におけるドミニコ会日本布教をめぐる諸相

滝　澤　修　身

Aspects of Evangelization of 17th Century Dominicans

Osami TAKIZAWA

Abstract

This article analyzes the evangelization practices of Dominicans in the 17th century from three viewpoints. First, the Dominicans' knowledge of Japan at the time. Second, cultural activities Dominicans undertook while in Japan and third, the Holy Week procession under the guidance of the Dominicans in Nagasaki. These historical issues have as yet not been thorougly researched in either Japan or Europe.

本稿においては、16・17世紀に日本、特に長崎で活動したドミニコ会の布教をめぐる諸相を、３つの観点から分析してみることにする。（１）ドミニコ会の日本認識、（２）ドミニコ会の日本布教をめぐる文化活動、（３）ドミニコ会による長崎での聖体行列の開催、以上である[1]。これらの観点は、現在までのドミニコ会日本布教史研究では、あまり追及されてこなかったテーマである。これらのテーマを明らかにすることは、当該期の日本、特に長崎におけるドミニコ会の宣教活動の諸相をさらに深く理解することにつながるものと考える。

第１章　ドミニコ会宣教師の日本認識

ドミニコ会宣教師が日本に到来し、宣教を行なう過程で、彼らは日本について様々な印象を持つことになった。その印象を伝える一つの興味深い書簡がある。トマス・デル・エスピリツ・サント・デ・スマラガ神父の1608年８月16日付けの「日本の地理と政体、ドミニコ会の日本での初期布教」と名付けられる書簡である。この他にも他のドミニコ会宣教師たちも日本の印象を彼らの著書や書簡のなかに書き記している。ここでは、それらの史料を取り上げながら、ドミニコ会宣教師たちが、日本をどのように認識していたのかを理解してみることにする。

[1] 第３章の「ドミニコ会が見た日本の聖体行列」の部分は、2017年の長崎純心比較文化学会会報（11）に掲載された講演録である。本論文では、講演録に若干の修正・加筆を加え収録する。

⑴　日本

ドミニコ会神父のディエゴ・アデゥアルテは、ヨーロッパ人歴史家たちの日本に対していただいた印象を次のように記している。

「どの国にも安定性が全くなくそれぞれの国や或いは全国の支配権がこの者からあの者へと移り、武力によってそれを守る以外に方法がなく、忠節の義務が如何に大きくても、主君が如何に尊敬されていてもそれは何の役にも立たない[2]。」

ドミニコ会の神父であるアロンソ・デ・メナは、1608年３月10日付けの書簡で初めてキリスト教布教に従事した鹿児島地方の特徴を次のように述べている。

「ここは日本だけでなく世界の中でも優秀な健康な地です。平らで果物が多く、人々は親切で理解力があり、すべて信仰を説くのに相応しいのです[3]。」

⑵　日本人

それでは、ドミニコ会宣教師は日本人をどう認識していたのかを分析してみたい。オルファネルは、彼の著書『日本教会史』において、「日本人は大変礼儀正しく、繊細な人びとである[4]」と書き記している。同会神父であるフランシスコ・モラレスは、1604年３月24日付けの書簡で日本人が大変親切な人であるという印象を述べているが、具体的には、次のような説明をしている。

「（薩摩の人びとは）銀貨で100ペソ以上と米60俵以上を私たちに恵んでくれたことがありますら、私たちはあまり見捨てられてはいません。また国王である殿（Tono）はこの国の習慣に従って、私たちに仕えさせるために或る町から10名の人を私たちにつけてくれました[5]。」

しかし、日本へやってきたあるスペイン船の乗組員は、日本人に対し別の印象を持っている。

「日本人の習性として獰猛・大胆・短気である.....[6]。」

---

[2] ディエゴ・アドゥアルテ著、『日本の聖ドミニコ』、ロザリオ聖母管区、1990、154ページ。

[3] ホセ・デルガード・ガルシーア、佐久間正訳『福者アロンソ・デ・メーナ書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1982、53-54ページ。

[4] オルファネル、『日本キリシタン教会史1602－1620』、雄松堂、1977、84ページ。

[5] ホセ・デルガード・ガルシーア、佐久間正訳『福者フランシスコ・モラレス　書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1973、27ページ。

[6] 『日本の聖ドミニコ』、ロザリオ聖母管区本部、1990、263ページ。

それでは、ドミニコ会宣教師は、日本人のキリスト教徒をどう考えていたのであろうか？エルナンド・デ・サン・ジョセフは、1627年１月29日付けの書簡で、日本人キリスト教徒の性格を次のように記録している。

「他の国の或る人々は自分たちが日本人よりも熱心なキリスト教徒だと思っているでしょうが、これによって（殉教者を熱い信仰をもって送ったこと）その人々よりも、日本人の方が秀れたキリシタンであることを証明しました[7]。」

それでは、日本人たちは初めてやってきたドミニコ会をどのように認識していたのであろうか？ディエゴ・アドゥアルテ神父は、次のように記している。

「（日本人は、）新しい修道士の人物・服装・言葉・行動・慎み深さ及びすべての修練に注目してい（る）。」

⑶　日本の仏教

さて、17世紀の日本のドミニコ会宣教師たちは、日本の仏教をどう認識していたのであろうか。アロンソ・デ・メナ神父は、長崎において書いた1618年４月21日から23日の書簡で、日本の仏教を次のように説明している。

「日本国には数多の宗派があり、大勢の仏僧が偶像を崇拝しそれによって無知の民衆に荒唐無稽なことを説いている。彼らは結婚しないから妻子がいないし、悪魔への愛と民衆を騙すために激しい苦行をする[8]。」

一方、ハシント・オルファネルは、仏僧について３つの意見を述べている。

第一に、「日本における布教の困難は、多数の坊主（ここにある偶像の従者たる宗教家をこう呼んでいます）から生ずるもの、彼らの数はきわめて多く、夥しい彼らの僧院があります。悪魔の地獄の如きものであるのに、樹木や花で美しく装ってあるので、そこに入ると天国へ行ったように思われます。彼らの僧服は、形は非常に異なりますが、その色は内側が白、外側は黒色で私たちの服に似ています。ここでは、彼らの偶像崇拝が盛んであって、祝祭やその他の諸事はみな異教のものです。キリシタンは数が少ないので、隅に小さくなっています。私たちの教会は２つ

---

[7] 『福者フランシスコ・モラレス　書簡・報告』、79ページ。

[8] APP. Mss, 301, f.135v;『福者アロンソ・デ・メーナ書簡・報告』、172ページ。

の仏寺の間にあり、非常に近いので、毎日彼らの祈りの合唱が聞こえます。（彼らが昼夜その勤行に励むことにおいて、その時間厳守は私たちに優るとも劣りません。）悪魔が彼らを騙している宗派は24あり、それぞれ各自の道を歩んでいます[9]。（1609年２月18日）」

第２に、「仏僧は数多宗派をもっていますが、２つの仏（Dioses）のうちの何れかを崇拝することではみな一致し、ある宗派は阿弥陀を、ある宗派は釈迦を拝み、苦業を行ないます。しかし私たちの信仰に改宗した仏僧のいう所によれば、その内面においては名付けることも出来ないような夥しい邪悪・愚劣なことを行なっています[10]。」（1619年３月15日）

第３は、「仏僧たちは異教徒の偽りの神々に仕える司祭、聖役者のごとき者であり、日本には数えきれぬほど多数いる。かかる仏僧の中には山中の庵に独居する者もおれば町の檀那寺に住んでいる者もおり、長老の許に僧院内で共同生活な営む者もいる。この種の僧院には極めて宏大で100人、200人、それ以上の仏僧を擁しているものがあり、たいてい、人里を離れた極めて閑静な場所に建てられているが、町や都市にあるものもある。各仏僧はそれぞれ目分の僧坊を有し、修行者を養成し（シャム Sian 国の人）、釈迦（Xaca）が自己の宗派について書き遺した経典たる仏法（Buppo）を学ばせているが、すべては彼らを欺くために考案された作り事である。この宗派は12派あるが、その中、日本では現在、以下の５派のみが弘通している。すなわち阿弥陀（Amida）を礼拝する浄土宗（Iondoxú）と同じく一向宗（Iccoxú）であり、後者はもっとも隆盛を極め厳格な戒律も乏しく学問も重視しないので、概して下層、庶民の宗派である。他の宗派は釈迦を礼拝する法華宗（Forquexú）、大日（Dainichi）を礼拝する天台宗（Tendayxú）および、礼拝の対象を全く有しない禅宗（Ienxú）である。禅宗の彼らは、出鱈目な問題の瞑想に耽るだけで、このために人里離れた場所に瞑想用として設けた多数の僧坊を擁している。檀徒に偶像を礼拝させるのは、そうしなければ仏僧が餓死するからであろう。仏僧は決して肉または魚のような生き物は摂らず、野菜だけを食するが、この野菜も時には苦行のために生のまま食べることがある。が、以上は表向きのことであって蔭では好き勝手なことをし、さらに悪質なこと、極めて忌まわしい行為に耽っている。彼らの僧服は着物（quirumono）すなわち純白の衣、時には白以外のこともあるが、通常は白色である。そして着物の上に白肩衣の代りに衣（coromo）を着る。衣は黒色で薄い粗目の麻製のもので、ごくゆったりとして地面にまで達するほど長い袖がついている。頭と顎鬚は常に剃刀で剃り、２つ折りの頭布を被っている。外出の際にはこのような服をまとい、長老あるいは高位僧の場合には伴侶として若い仏僧ないしは修行僧を同伴する。日本人は偶像崇拝に熱心なので自分たちの仏僧すなわち坊主（Bózu）（これが仏僧本来の名称である）を大いに尊敬、尊重する[11]。」

---

[9] ホセ・デルガード・ガルシーア、佐久間正訳『福者オルファーネル　書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1983、42ページ。

[10] 同書94ページ。

日本で布教に従事するドミニコ会宣教師たちは、日本人は偶像崇拝を行なっていることを認識していた。ドミニコ会が日本にやってくる以前から、日本で活動していたイエズス会などからも偶像崇拝に関する情報は入っていたであろう。ドミニコ会が日本へ入国し、薩摩の国、甑島にやってきた時には、ドミニコ会宣教師たちはすでに日本人の偶像崇拝に気付いたことは確かである。

「異教徒の悪い司祭たる坊主の住んでいた家でそこには偶像や彼らの宗教用具があった[12]。」

また、ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネスに次のような見解を述べている。

「また石の新らしい偶像が建てられました。それは或る村の長が考え出したのであって、人々はみな「それは霊験あらたかなもので、拝むと幸わせになる」と言って、それを拝みに行きました[13]。」（1610年１月27日）

ドミニコ会宣教師は、布教中に山伏に遭遇することもあったようである。山伏に関しては、多数のドミニコ会がその書物や書簡のなかで、意見を述べている。ドミニコ会宣教師アロンソ・デ・メナは、山伏について長崎で認めた書簡にこうして記している。

「この後、たまたま彼の家の戸口に施物を求めに一人の山伏が来ました。（これは悪魔と交際をもって偶像の庵すなわち寺院のため施物を求める一種の魔法使いです[14]）。」（長崎、1614年12月）

更に、1618年付け長崎で書かれた書簡には山伏について次のように記されている。

「この日本国には数多の宗派があり、大勢の仏僧が偶像を崇拝しそれによって無知の民衆に荒唐無稽なことを説いている。彼らは結婚しないから妻子がいないし、悪魔への愛と民衆を騙すために激しい苦業をする。このほかに結婚して俗人の生活をしている山伏というのがいる。これはとくに悪魔に仕えて妖術を使い、日本の諸国にいる長に服従していて或る時期に山に集まる。この山は富士之嶽・愛宕・比叡山・伊都彦山・伊豆箱根とくに大峯や葛城などで、ここでは悪魔が最も崇拝されている。

これらの山に悪魔が棲んでいて、山伏はこの悪魔と話をし、連絡を取りその仕事は何よりも先ず

---

[11] オルファネール『日本キリシタン教会史（1602-1620）』、雄松堂書店、1977、７-８ページ。
[12] ホセ・デルガード・ガルシーア、佐久間正訳『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス　書簡・報告』、キリシタン文化研究、1976、133ページ。
[13] 前掲書、46ページ。
[14]『福者アロンソ・デ・メーナ書簡・報告』、133ページ。

妖術である。悪魔の力やあるいは自分の詐術で人体から憑物を追い払ったり、その他の病気を表面的に治ったようにする術を習う。しかし神は時にはこれらの欺瞞を悪魔に許すことがある。山伏は人体から憑物を追い払うときに先ず十の字の印を切って「臨兵闘者皆陣在云々」と言う。彼らは神が如何なる所においても栄誉を給う十字の印を切るが、それは、十字はそれ自体の中に神が在ますほど崇拝されているからである。山伏は袈裟という飾りを頸に下げ、兜巾という一種の頭巾をかぶり、妖術を行なうとき悪魔を呼ぶために鈴のついた棒を持っている[15]。」

オルファネールは、彼の著書『日本キリシタン教会史（1602-1620）』のなかでは、山伏について次のように記している。

「この二人の青年は山伏（Yamabuxi）いわば悪魔の行者であり、日本の極めて高い山岳に住んで人間との交渉を一切断ち、ひたすら悪魔に仕え、通常、悪魔と生活を共にし、妻帯者で長老を有しその命に服従する。山伏は喜捨を求めて村や町に現われ、病人あるは悪魔つき憑きがおれば、山伏の許に連れて行くか、あるいは山伏を家に招いて祝福、否、より正確に言えば、呪をかけてもらう。山伏は終始、悪魔に祈念しながら、これをある儀式や呪文で行い、常に印刷された目録や悪魔の絵を携えては人に渡す。山伏はまさしく呪術師である。町あるいは村へ入る時には到着を知らせ、人々が準備をするようにと角笛、またはトランペットの代りに法螺貝を遠くから吹く。服装は日本の通常のものであるが、頸に房または房飾りを下げ、頭には網目の極めて小さな帽子を被り、悪魔を呼ぶ棒には鈴が若干付いている。頭髪は長期間剃っていない者のごとく長く逆立っている。哀れなこの二人の青年はこのような地獄の人であり、既に悪魔に身な委ね、日夜、それに奉仕していた[16]。」

⑷ 戦国大名

ドミニコ会宣教師が日本に到来した時期、1581年から1637年は、織田信長の天下統一の事業のもと豊臣秀吉が中国地方の毛利輝元との戦いを繰り広げていた時期から、江戸幕府が成立し、徳川家光によって幕府が強固に確立されていった時期にあたる。イエズス会宣教師たちは、その布教のために特に大名や領主層を厚遇したが、ドミニコ会宣教師に関しても史料を解読してみると、大名や地方の領主と係りをもっていたことが理解できる。またドミニコ会宣教師も豊臣秀吉や、九州の領主たちに関する数々の記録を残している。ここでは、その幾つかを紹介してみることにする。まず、豊臣秀吉に関しては、次のように述べている。

---

[15] 前掲書、170ページ。

[16] オルファネール『日本キリシタン教会史（1602-1620）』、232ページ。

「藤吉郎は自らを太閤と称しています。美濃の出身で一商人の薪や酒造の仕事の使用人でしたが、信長に仕えるようになりました。信長は病気を装ってその偽りの病床で兄を殺し尾張の領主になりました。都を目指して進み、藤吉郎を千人の兵の長とし道中勝利を得て長浜城に到り、この城をその土地と共に彼に与えその名を羽柴筑前（Ychikuzen）と改めさせ、これを総武将に任命し、1567年に都を手に入れました[17]。」

一方、

「秀頼の父・太閤は、日本で神（Cami）言わばもはや聖人の列に加えられた英雄的人間として尊敬され、彼ために神社が建立されていた[18]。」

とも記録されている。フアン・デ・ラ・アバディーア修道士は、ドミニコ会が日本へ入国した始めの数か月の報告の中で、鹿児島の領主である島津氏の親切さを書き記している。

「これらの武士は国王から神父への贈物として魚や各種の果物および米をもって来て、それと共に神父を護って行くために多数の日本人を準備して来ました[19]。」

しかし、ハシント・オルファーネル神父は、日本の領主の二面性を指摘している。

「（日本の領主は、）キリスト教を認めているのはただ利害関係によるのであるから、もしその利益がなくなったり、或いは考えが変われば、思うがままの態度をとるからです[20]。」

(5)　長崎

長崎は1571年に開港してから、日本のキリスト教の中心地になっていった。ドミニコ会の最も華やかな時期の活動も長崎で展開されている。それでは、ドミニコ会宣教師は、長崎の町にどのような印象を持っていたのであろうか？

「長崎市は日本の全キリシタンの中心地であり、他国を追放された人々はここを安全な港として集まって来ます。それは異教徒が一人もいない、或いは殆んどいないからであり、全く平穏にキリシタンとして振る舞えるので、異教徒たる奉行に支配されているというよりはヨーロッパの真

---

[17] AP, Mss.301, f.132;　オルファネール『日本キリシタン教会史（1602-1620）』、160ページ。
[18] オルファネール『日本キリシタン教会史（1602-1620）』、160ページ。
[19] AP. Mss.301, f.57;『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス　書簡・報告』、134ページ。
[20]『福者オルファーネル　書簡・報告』、1983、40-41ページ。

中にいるように思われます。ここには多くの立派な教会があり極めて平穏に生活していました。それは、マカオやマニラ、その他の貿易のために長崎が平穏であることを、将軍も諸領主もみな希望していたからです。何故なら、他の国から来る人々は大多数がキリシタンであるから、長崎がキリシタンの町でなければ貿易が行なわれないからです。教会がなければパードレたちもあれほどは来なかったでしょう[21]。」

⑹ 日本人が見たドミニコ会宣教師

今まではドミニコ会宣教師が日本人を取り巻く社会をどのように認識していたのがという事柄を扱ってきたが、逆に日本人たちはドミニコ会宣教師をどのように認識していたのかを少々分析してみたい。ドミニコ会宣教師と日本人の相互認識を理解してこそ、筆者の分析に深い意味が生まれると思われる。文化人類学的に見ても興味深いテーマであろう。日本人のドミニコ会宣教師の評価は、大別して、肯定的、否定的の二つに分かれている。まず肯定的な評価から紹介したい。アロンソ・デ・メナの1609年の書簡には、日本人のドミニコ会宣教師に対する敬意が読み取れる。

「世の中を救うために偉大な苦業を行なった阿弥陀の生涯や、彼らが崇拝するもう一人の悪魔である釈迦の生涯、及びこの二人がパードレと同じように数多の苦業を行なったことを語り始めた。その場にいた人々のうちの秀れた一人が、「彼らはみなパードレたちほどは苦業を行なっていない。何故ならば彼らは自分の国を出ていないのに、修道士は両親・親戚・祖国を棄てて未知の人々の中に身を投じている。これは私の考えでは為し得る最大の苦業であると思う[22]。」

他の日本人達は、長崎のキリシタンがドミニコ会宣教師に会った時の状況を次のように語っている。

「キリシタンはバードレが修道服を着ているのを見て喜びを以て歓迎し、見るだけでは満足せずに深い敬意と信心・愛情をこめて、肩衣（escapulario）や修道服に接吻をし、その上に涙を落とした[23]。」

いかに長崎のキリシタンがドミニコ会宣教師に信頼していたのかが理解できよう。

一方、ドミニコ会宣教師に対する否定的な評価もあった。アロンソ・デ・メナが、長崎で1618年３月に書いた書簡には、

---

[21]『福者アロンソ・デ・メーナ書簡・報告』、144ページ。
[22] 前掲書、74ページ。
[23]『日本の聖ドミニコ』、218ページ。

「パードレは豚のようなもので「役に立たぬ」汚い動物[24]。」と評価する者たちもいた。

またディエゴ・コジャードの記録によると、「宣教師を悪魔の長である」と考えていた日本人の役人たち[25]もいたようである。アロンソ・メナの1618年３月付け長崎発の書簡には、「修道士は国を征服しに来たのである[26]」とも記されている。

日本人の中には、初期的な段階ではドミニコ会士に悪印象を持っていた者もあったが、次第に彼らの宣教の本質を見抜く日本人たちも現れてきた。例えば、フランシスコ・モラレスは、1627年11月29日付の殉教報告で次のように記している。

「異教徒は神父が領土を奪うために来たと考えて神父の生活を見ていました。これは布教にとって大きな妨げでしたが、いま神父が殉教に赴いたのを見て、彼らは「人は死んでから何のために領土が必要だろうか。死ぬ人がこの世で財産を積むことは道理に合わない」と考え、多数の異教徒が神父たちは国を奪いに来たのではない、ということを理解しました[27]。」

ディエゴ・アドゥアルテは、次のようにも記録している。

「或る日本の貴人は、ドミニコ会宣教師に「貴殿らはこれほど悪徳や［罪の］危機から離れた生活をしているのであるから、これほど貧しい生活をし、粗末な衣服を着、その他の類似のことをしているのは愚かである[28]。」

日本人は、ドミニコ会宣教師が、「清貧・苦業、命のへの無執着、慎ましさ、謙虚、儀正しいふるまい[29]。」を行なう者であることを次第に理解していった。ディエゴ・コジャードの『日本キリシタン教会史』には、日本人達が、「ドミニコ会の修道士は他の修道会士より優れ、長崎のドミニコ会士や彼らのロザリオの組も素晴らしいものである[30]」語っていたことが記録されている。

第２章　ドミニコ会の文化活動

この章では、日本におけるドミニコ会の文化活動に焦点を絞って分析を試みたい。ドミニコ会宣教師が日本で宣教したのはわずか30年間ほどであったが、彼らは数多くの文化活動をめぐる功

---

[24]『福者アロンソ・デ・メーナ書簡・報告』、205ページ。
[25] ディエゴ・コリャード『日本キリシタン教会史　補遺（1621-1622)』、雄松堂、1980、40ページ。
[26] ドミニコ会ローマ総古文書館Ｘ・163、225ページ。『福者アロンソ・デ・メーナ書簡・報告』、209ページ。
[27]『福者フランシスコ・モラレス　書簡・報告』、1973、102ページ。
[28]『日本の聖ドミニコ』、111ページ。
[29] 前掲書、138ページ。
[30] ディエゴ・コリャード『日本キリシタン教会史　補遺（1621-1622)』、69ページ。

績を残している。筆者は、この功績は日本ドミニコ会宣教活動を特徴付けているものと考える。

⑴　適応主義

イエズス会宣教師は、フランシスコ・ザビエルの時代から適応主義を展開し、日本の文化や習慣に適応しようと考えた。アレハンドロ・バリニャーノは、日本の習慣、道徳、知的活動、言語などにイエズス会士が適応しなければならないことを命じている。こうした目的のもと「イエズス会礼法指針（1581）」が著された[31]。バリニャーノの影響で、イエズス会宣教師は、日本の文化を尊重するようになっていく。一方、バリニャーノの弟子であるマテオ・リッチは中国で適応主義を体現化していった。彼は、孔子をイエス・キリストと同等なものとし、儒教の教えがキリスト教に反するものではないと主張した。マテオ・リッチの考えには、スペイン系修道会、特にドミニコ会が猛烈に反対し、典礼問題にまで発展した。では、日本にやってきたドミニコ会宣教師は、日本社会への適応をどのように考えていたのであろうか？

ヨーロッパの修道院の伝統を引くドミニコ会を始めとするスペイン系托鉢修道会は、適応主義を重んじなったと考えられるのが一般的である。適応主義という面では、イエズス会とスペイン系修道会とはまったく異なっていたと考える研究者も多い。しかし、17世紀の日本のドミニコ会の史料を解読すると彼らは可能な限り日本社会に適応しようとした面があるのではないかと推測される。今まで、研究者の間で、スペイン系修道会はまったく現地社会への適応を認めなかったと言われているが、そうではないのではないだろうか？それでは、具体的な証拠を示していきたい。ドミニコ会の日本布教の最初の段階で、フランシスコ・モラレス神父はこう述べている。

「私たちは此処で修道会とこの聖管区の会則を守ることに努力していますが、場合によってはここに述べるように、出来ないことがあります。この事は台下がたの御指導に委せます。例えば板の寝台の上に寝ることは今までしていません。此処ではそれを実行するための機会がなく、私たちはここで使っている藁の莚の上に寝ています。この莚は二重なっていますから、板よりも柔らかいのです。その莚の見本を送りますから、台下がたはそれを見て、板の替りにそれを使うことが許されるかどうかご指示下さい。私たちは決められた事を正しく守ります。

間食の飲物や食物についても、会則に書いてあるままを正確にここで守ることは出来ません。この国の習慣で訪問をすると必らず、少しわかした湯で茶といわれる草を煎じて飲ませます。そしてそれを飲むときに、はしぼみの実の大きさの食物を出します。これは食物というより儀礼ですから、私たちは今までこれを日本人と同じにして来ました。しかし台下がたがこれを直す必要があると思われましたら、お知らせ下さい。

---

[31] ヴィットリオ・ヴィルビ『巡察師ヴァリニャーノと日本』、一芸社、2008、341。

教会では、貧困のため典礼の定める色わけの祭服を使うことが出来ません。白衣（祭典用の白い短い上衣）一着と洗礼のときに道具を置く机掛けが必要です。旅行中に洗礼を授けるための聖水盤もありません。ある程度壮重に洗礼を授けないと受洗者はこの秘蹟を重く見ません。ロザリオやアグヌス（イエズスや聖人の姿を蝋で形作っている信心用具）及び美しく飾ってある聖遺物を私たちに送って下さい。何故ならばこれらのものは新らしい受洗者に愛情を示すため、また彼らの心を信仰に向けさせるために此処ではたいへん役に立ちます。

ここ（日本）に来る修道士は我らの会則に反しないかぎりは、すべて日本人の生活に順応しなければなりません[32]。」

フランシスコ・モラレス神父の同僚のサン・ハシント・オルファネル神父も日本の文化や習慣に適応しようと考え、着物を着て、日本食を食べ、日本語を必死に習得しようと試みている。日本人でさえもこの神父を日本人で思うほどであったと言う[33]。以上の事例からも理解できるように、確かにその程度は、イエズス会とは異なっていたが、日本のドミニコ会宣教師の間では「適応主義」という考えは共通認識であったことは明らかであろう。それでは、彼らの書簡や報告をもとに、さらに具体的にドミニコ会宣教師の日本社会への適応をさらに詳しく分析していきたい。

第一に、ドミニコ会士は、日本の食習慣に適応しようといている。ディエゴ・アドゥアルテの報告に従うと、ドミニコ会士は日本では肉を一切食さなかった[34]。この習慣は、日本人にとっては大変重要なものであった。何故ならば、仏教の掟により、ある種の動物以外の肉食が禁じられていたからである。仏教の思想によると、食肉は不浄の罪とされ、この習慣は江戸時代が終わるまで存続した。イエズス会のアレハンドロ・ヴァリニャーノは、日本では飲茶と飲酒が必要不可欠であると述べているが、ドミニコ会士もこの習慣の重要性に気付いていた。1604年３月24年、ドミニコ会宣教師フランシスコ・モラレスは、日本では訪問客に茶と菓子を提供する習慣があると記している[35]。1609年３月１日付けの書簡に記されるサン・ハシント・サルバネスの記録は大変興味深い。

「私が盃の肴を箸で取ろうとすると、彼（日本人）にとっては初めてですから、「箸を使えないであろう」と言いました。私が、「日本人と同じように使えます」と答えると彼は笑いました。彼は、私の行うその他の儀礼に深く満足し日本人のようであると言いました[36]。

---

[32]『福者フランシスコ・モラレス　書簡・報告』、26-28ページ。
[33]『聖ドミニコ会日本報告集』、321ページ。
[34] 前掲書、334ページ。
[35]『福者フランシスコ・モラーレス　書簡・報告』、27-28ページ。
[36] ホセ・デルガード・ガルシーア、佐久間正訳『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス　書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1976、38ページ。

第二に、日本のドミニコ会宣教師は、毎日曜日は、黒と白の修道服ではなく、着物を着用したようである[37]。この習慣は、日本人の役人からの監視を免れるためではなく、日本の習慣に適応しようとした結果であった。この他、日本のドミニコ会士は、様々な分野で日本の習慣に適応しようと試みた。例えば、ディエゴ・コジャードは、着物を着ている時は、日本名「又右衛門」と名乗っていた[38]。

しかし、ドミニコ会士たちは、日本の習慣や仕来りに適応するのに厳格な決まりを有していたようである。

「薩摩の殿は私たちの事を忘れず、たびたび銀と米を送ってくれて私たちを喜ばせました。また私たちに400石の禄を与えようとしましたが、私たちはそれを受けずに、申しました。「殿様が施しを下さるならば、私たちは貧しいのですから、それを喜んで戴きますが、俸禄は受けません。何故ならば私たちが殿様の国に来たのは、この世の財産を得るためではなく、日本人の知らない真実の神と救いを知らせる為でありますから[39]。」（1620年初め）

ドミニコ会宣教師たちは、彼らの会則を吟味しながら日本社会への適応をはかったのであろう。次第に、日本人たちもドミニコ会宣教師の慎ましい努力を理解していくようになっていった。フランシスコ・モラーレスの1620年付けの書簡に従うと、日本人たちはドミニコ会の次の二つの態度を大変好んだと言う。

１．日本人が多用している、黒と白の修道服を着用している。
２．肉を食べないこと[40]。

ドミニコ会宣教師は、日本布教のために日本語を熱心に学んだ[41]が、これも日本人の社会に適応するためであったと推測させる。ドミニコ会宣教師の記録によると、通常、日本人がドミニコ会宣教師に日本語を教えていたことが明らかになる[42]。同時に、ドミニコ会宣教師は日本語の本を使用し、日本語を学んでいる。

「11月末に甑島へ帰る許可を領主から得て、甑島に小さな日本家屋を建て、その半分を住居とし、他の半分を教会にあてた。この小さな家が彼らの日本語学習の教室であり、その師は手に入れた

---

[37]『福者ハシント・オルファネール　書簡・報告』、106ページ。
[38] コリャド『日本キリシタン教会史補遺』、27ページ。
[39] AP. Mss.301, f.87;『福者フランシスコ・モラーレス　書簡・報告』、223ページ。
[40] AP. Mss.301, f.86 v;　前掲書、222ページ。
[41]『福者アルンソ・デ・メーナ　書簡・報告』、54ページ。肥前発、1608年３月10日付けの書簡。
[42]『聖ドミニコ会日本報告集』、288ページ。

僅かな書籍であった[43]。」

日本にやって来た頃には、ドミニコ会が編纂した本も少なかったであろうから『ドチリナ・キリシタン』、『サントスの御作業』[44]といった、イエズス会の出版した「キリシタン版」も教材にしていたのではなかろうかと推測される。

⑵　日本人説教者の採用

日本社会への適応主義の一環として、日本ドミニコ会は、日本人の説教者を採用している。ドミニコ会の日本での活動は僅か30年余りであったが、数多くのドミニコ会日本人説教者の存在が記録されている。次にフランシスコ・モラレスの1604年３月24日付け書簡から、日本人説教者の育成に関する見解を紹介してみたい。

「この仕事は最も重大なものです。それは、私たちは日本人の援助なしには何も出来ないし、望んでいる布教の実を結ぶ事も出来ないからです。そのためには日本人を幼児の時から聖トマースの教えに従って教育しないと、これらの成果を得ることが出来ません。私たちは信仰を伝える総ての国々に聖トマースの教えを説明し伝えますが、人々が異教を受け入れやすいこの日本ではとくに必要です。何故ならば異教の詣宗派は私たちの信仰のある点に順応しているように思われますから。それゆえ我らの教えが他の教えと違うのがわかり、そして我らの信仰は他の信仰を照らすものであることを理解させるためには、言葉と教義を教えることが必要です。人々は国語を幼い時から母親から習いますが、教義は修道士が教えなければなりません[45]。」

このような教育方針の通り、日本のドミニコ会宣教師は、多くの日本人説教者を育成している。最初にトマス・デ・ロザリオを取り上げてみたい。彼は、九州生まれの孤児であった。ドミニコ会は、この孤児を拾い、教育を施した[46]。トマスは成長し、ドミニコ会の神学生となり、トマス・デ・ロザリオという名の修道士となった[47]。その後、優れた説教師となった。この修道士は、毎日、教義、精神修養、日本のロザリオへの信心を説いた[48]。ドミニコ会スマラガは、彼の活動を大変賞賛した。スマラガ神父が牢屋に繋がれた時、トマス修道士は「私には父親がおりません。そこでスマラガ神父と一緒に牢屋に入らせてください。」と言った。しかし、役人はこれを拒否

---

[43]『福者アルンソ・デ・メーナ　書簡・報告』、23ページ。
[44] 前掲書、23ページ。
[45]『福者フランシスコ・モラーレス　書簡・報告』、26ページ。
[46] ホセ・デルガード・ガルシーア、佐久間正訳『福者トーマス・デル・エスピトゥ・サント・デ・スマラガ　書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1984、121ページ。
[47] 前掲書、26ページ。
[48]『福者ホセ・デ・サン・ハシント・サルバネス　書簡・報告』、68ページ。

した。その後、トマス修道士は、アンゲル・オルスッチ神父とフアン・デ・サント・ドミンゴ神父と入獄を共にしている[49]。

ドミニコ会宣教師が日本にやってきた当時は、孤児となったら、甘んじて死を受け入れるしかないという社会状況であった。しかし、ドミニコ会宣教師は自ら進んで孤児の育て、キリスト教の教育を施した。これらの孤児は特別な教育機関で学習したわけではないが、立派な宣教師にと育っていった。ドミニコ会の宣教により、多くの日本人が洗礼を受けることになったが、彼らは初めて自由という概念を知り、それを享受したのではないだろうか？何故なら、当時日本には、強固な封建制度のもと「人間の自由」と「人権」という概念が存在しなかったからである。

ドミニコ会宣教師は、「同宿」と呼ばれる日本人伝道士を育成し、雇い入れた。同宿の起源は、16世紀のイエズス会の布教期に遡る。同宿の仕事は、日本人に対しキリスト教の教義を説明したり、神父の手伝いをすることであった。しばしば、洗礼を施すこともあったし、信者の告解を聴くこともあった[50]。ドミニコ会には、20名の同宿がいたことが確認されている[51]。多くのドミニコ会宣教師の書いた書簡、報告に同宿の活動が記録されている。

オルファネール神父の1619年10月25日付けの書簡には、次のように記されている。

「1616年10月筑後国において百姓マルティンが殉教しました。その死の前にドミニコ会の古い同宿が彼を励ましました。この同宿は、私たちの布教地たる肥前国の佐賀市で信仰のために死んだパブロ・タロスケという殉教者の遺体を収容する目的で管区長代理に派遣された者です[52]。」

「（同宿パブロ永石の）仕事は、長崎市内や諸村のキリシタンに聖人の伝記を読んで聞かせ、洗礼のために異教徒を教育することでした[53]。」

同宿の他にも、小者、看坊と呼ばれる者たちがいた。小者は、神父や修道士の身の回りの世話をして、典礼の道具を用意した[54]。日本のドミニコ会士の史料を解読すると、ドミニコ会修道女がいたことが明らかになる[55]。マリア、マグダレナといったドミニコ会修道女が知られている。マリアは、ベルトゥラン神父からドミニコ会第三会の入会を許された。非常なる高徳を持った修道女で、日本にも初期教会の頃と同じ大変勇気を持った修道女がいると褒め称えられている。彼女は、穴吊りの刑で殉教を遂げている[56]。マグダレーナは、両親が殉教したため、孤児となった。

---

[49]『福者トーマス・デル・エスピトゥ・サント・デ・スマラガ　書簡・報告』、121ページ。
[50]『福者ハシント・オルファネール　書簡・報告』、99ページ。
[51] 五野井隆史、『日本キリスト教史』、吉川廣文館、1990、４－５ページ。
[52]『福者ハシント・オルファネール　書簡・報告』、130ページ。
[53] 前掲書、140ページ。
[54] 五野井隆史、『日本キリスト教史』、４－５ページ。
[55]『福者ハシント・オルファネール　書簡・報告』、122ページ。
[56]『聖ドミニコ会日本報告集』、447ページ。

ジョルダン神父が彼女を霊的な娘として育て上げることになった。マグダレーナは、同神父から修道女に認められた。彼女は、過酷な拷問を受け殉教を遂げた[57]。

修道女の存在も当時の日本では驚くべきものであった。当時、女性の地位は非常に低いものとされた。家長の力は強く、女性たちは自由を享受し、人生を選択することはできなかった。武家の女性たちは、家の名誉と威厳のために生きなければならなかった[58]。こうした状況であっても、ドミニコ会宣教師は、孤児となった女の子を拾い上げ、修道女として育て上げた。日本ドミニコ会宣教師には、サラマンカ学派のフランシスコ・ビトリアの唱えた「人権」が貫き通されていたのであろう。

一方、マニラのサント・トマス教育院（サント・トマス大学の前身）では日本人の修道士や司祭が誕生している。トマス西、ヤコボ・デ・サンタ・マリア朝長、ハコベ・ナガマである。トーマス・デ・サン・ハンシント西兵次神父は1594年に平戸の生月で生まれた。父は、生月の支配者であった西玄可であった。トーマス西は、有馬、長崎のイエズス会のコレジヨで学び、1614年にマニラに追放された。1616年に日本に帰国した。そこでドミニコ会宣教師と仲良くなり、再度マニラに渡り、サント・トマス教育院で学んだ。1624年８月15日、ドミニコ会に入会した。神学を学んだのち、神父となっている[59]。

ヤコボ・デ・サンタ・マリア朝長は、1624年にドミニコ会修道士となり、この霊名を得た。その後、神父となっている[60]。ハコベ・ナガマは、1625年６月11日に、マニラのサント・ドミニゴ修道院でドミニコ会に入会した。そして、ディエゴ・サンタ・カタリナという霊名を得た[61]。

彼らの他にもドミニコ会の修道士となった人物もいた。ディエゴ・コジャード神父の報告によると、大村の牢獄の中で、日本人マンシアが修道士となってドミニコ会に入会したと記録されている[62]。牢獄の中での修道士への着任は、まさしく魂の永遠性を信じるキリスト教徒がなせる業である。

⑶　日本報告

フランシスコ・モラレス神父は、1620年初めの書簡の中で、日本人達がドミニコ会を好む理由として次のことをあげている。「（ドミニコ会士たちが）学問ある人と話すことを（好むこと）です。何故ならば仏僧も学問があればあるほど尊敬されるはずですが、哲学も科学的な学問も知らず、ただ中国のような漢字を知っているのみです[63]。」日本人は、ドミニコ会の知的さに魅了され、

---

[57] 前掲書、447ページ。

[58] 新渡戸稲造、武士道、講談社、1998、232ページ。

[59] 『聖ドミニコ会日本報告集』、399-400ページ。

[60] 前掲書、423ページ。

[61] ホセ・デルガード・ガルシーア、岡本哲男訳『フアン・デ・ロス・アンヘレス・ルエダ神父　伝記、書簡、調査書、報告書』、聖ドミニコ修道会、1994、235ページ。

[62] コリャド『日本キリシタン教会史補遺』、25ページ。

彼らを尊敬していたことは明らかである。それでは、ドミニコ会士の知的活動について述べていきたい。

日本ドミニコ会の史料を解読すると、マニラのサント・ロザリオ管区は、フィリピンと日本の間に通信制度を確立しようとしていたことが理解できる。ドミニコ会の日本布教の初期的な時期から、幾人かのドミニコ会宣教師は、マニラに日本の報告書簡（大村発、1605年11月20日）を送っている[64]。スマラガ神父やメーナ神父も、ディエゴ・アドゥアルテ神父に日本に関する情報を送っている。ディエゴ・アドゥアルテ神父は、1611年にパリのサンティアゴ修道院で開催されたドミニコ会の総会にフィリピンのロザリオ管区のメンバーとして参加しているが、この総会を通じ、日本でのドミニコ会の宣教状況が他国のドミニコ会宣教師に報告されている[65]。

その後、マニアの聖ロザリオ管区の会議で、ドミニコ会のフランシスコ・ウルタド神父が管区の歴史を編纂することが命じされた。1619年４月20日、ウルタド神父は、更にフランシスコ・モラレスとアルフォンソ・デ・メーナに日本の宣教状況の編纂を手掛けるように命じた。こうして、フランシスコ・モラレスとアルフォンソ・デ・メーナは、日本管区での布教状況を年代記風にまとめ、マニラのウルタド神父に送った[66]。上記の計画に従って、ルエダ神父は、『ロザリオ年報』（Anales de Rosario）、『ロザリオの祈り』（Rezo de Rosario）を1622年から1623年にかけて出版した[67]。現在、『ロザリオの祈り』は、マドリードの国立図書館に保存されている。

同時期に、マニラ管区は、日本のドミニコ会宣教師に宣教状況を報ずるように命令している[68]。こうした状況下、ハシント・オルファーネル神父が、日本の宣教状況を編纂し始めたのであった。ハシント・オルファーネルは、日本でのドミニコ会殉教者の証言、書簡、報告書、他の修道会士の殉教に関する証言を整理し、記録しようと試みた[69]。しかし、彼は日本人によって捕縛され、投獄されてしまった[70]。そこで、フランシスコ・モラレス、トマス・デ・スマラガ、アルフォンソ・メナといった修道士たちが、日本での殉教の証言を行なうことになった。彼らの手直しも加わり、ハシント・オルファーネルは、1621年３月17日に彼の作品を完成させ、それをマニラに送った[71]。11月末、ディエゴ・デ・コジャードは、モラレスの著した『日本キリシタン教会史』、他の書簡を持って日本を去り、ローマへと運んだ[72]。1633年に、ディエゴ・コジャードは、マドリードで『日本キリシタン教会史』を公刊した[73]。

---

[63]『福者フランシスコ・モラーレス　書簡・報告』、222ページ。
[64]『福者アロンソ・デ・メーナ　書簡・報告』、45ページ。
[65]『福者アロンソ・デ・メーナ　書簡・報告』、52ページ。
[66]『福者ハシント・オルファネール　書簡・報告』、97ページ。
[67]『福者フランシスコ・モラーレス　書簡・報告』、216ページ。
[68]『フアン・デ・ロス・アンヘレス・ルエダ神父　伝記、書簡、調査書、報告書』、46ページ。
[69] オルファネール、『日本キリシタン教会史』、雄松堂、1977、333ページ。
[70]『福者トーマス・デル・エスピトゥ・サント・デ・スマラガ　書簡・報告』、90ページ。
[71]『福者ハシント・オルファネール　書簡・報告』、26ページ。
[72] 前掲書、179、187ページ。
[73] 前掲書、183ページ。

更にディエゴ・アドゥアルテが、日本に関する書物の編纂に貢献した。彼は、1569年サラゴサに生まれた。1586年４月29日にアルカラ・デ・エナレスの修道院で修道士となった。その後、1606年にフィリピンに渡った。1632年には、ローマ教皇が、ディエゴ・アドゥアルテをヌエバ・セゴビアの司教に任命したが、その４年後帰天している。彼は、『フィリピン、日本、中国の聖ロザリオ管区の歴史』を著し、この管区でのドミニコ会の50年に渡る歴史をまとめたのであった。1640年、初版は刊行され、1693年にサラゴサで第２版が出版された[74]。

(4)　ディエゴ・コジャードの日本研究

1589年頃、ドミニコ会神父であるディエゴ・コジャードは、スペインのカセレス県で生まれた。1605年７月28日、彼はサラマンカのサン・エステバン修道院で修道士となった。1610年に、フィリピンでの宣教に参加するために、秘かに同修道院を去った。1611年にはアロンソ・ナバレテの指導もと、マニラに到着した。フィリピン諸島で働いた後、７月末、長崎に到来した。ディエゴ・コジャードの日本語能力は天才的であった。日本人の告解を素早く聴きとったという。1621年には、有馬地方の宣教に従事し、オルファネル神父の『日本キリシタン教会史』の編纂の手助けをした。ペドロ・スニガ神父、ルイス・フロレス神父が捕縛された後、ディエゴ・コジャード神父が日本の管区長代理に任命された。その後、マニラの上長が、ディエゴ・コジャードにマニラに戻るように命じた。彼は、26聖人の殉教を正式に調査し、聖ロザリオの代表者としてマニラ経由でローマに渡った。ローマでは、数多くの著述をなしている。具体的には、日本イエズス会士への反論、ポルトガル国王の布教保護のもとでのイエズス会士の問題点、日本でのイエズス会士の貿易についてなどであった[75]。聖教省（Propaganda Fidei）の援助で、『日本語文法』（1632、ローマ）、『羅西日辞典』（1632、ローマ）、『懺悔録』（1632、ローマ）なども著している[76]。1633年には、『日本キリシタン教会史補遺』を執筆している。

(5)　ロペ・デ・ベガ

日本のドミニコ会士の活動は、一人のスペインの知識人に大きな影響を与えた。彼の名は、ロペ・デ・ベガである。彼は、1562年11月25日に、マドリードで生まれた。両親は高貴な出自であったが、ロペ・デ・ベガは慎ましい暮らしの中で育った。５歳の時に、スペイン語とラテン語を読むことを学び、12歳の時に４つの戯曲を書き上げた。その後、マドリードのコレジヨで学んだが、この時期、イエズス会の演劇の影響を受けた。1582年までアルカラ大学で学んだ。20歳の時に、

---

[74]『聖ドミニコ会日本報告集』、23-30ページ。

[75] コリャド『日本キリシタン教会史補遺』、i-xii ページ。

[76] José Luis Espinal, San Esteban de Salamanca, Historia y Guía (Siglos XIII'XX), Editorial San Esteban, Salamanca, 1995, pp.176-179.

既婚者の女性、エレナ・オソリーナに恋した。ロペ・デ・ベガは、生涯を通じ、1500から2500の戯曲を書いたとされる。現在、425の作品が残されている。17世紀の初頭、スペイン黄金時代の最も傑出した劇作家とされる。彼の作品は、王室から庶民に至るまで愛された[77]。

この偉大なる劇作家は、『日本における信仰の勝利』という題名の作品を書いたが、これは、ドミニコ会士ハシント・オルファネルの1615年３月28日付けの手紙に刺激を受け書かれたものであった。オルファネルの手紙は、「日本殉教報告（有馬、有家、口之津）」という題名が付けられていた[78]。またロペ・デ・ベガの『日本の最初の殉教者達』の主人公は、ドミニコ会士のアロンソ・メナであった[79]。日本でのドミニコ会の活動は、この高名な劇作家の作品が描いている通り、当時のスペイン社会に大きな衝撃を与えたものと考えられる。

⑹　ルイス・デ・グラナダ

多くの日本ドミニコ会宣教師の史料が、日本のキリシタンたちの信仰生活に大きな影響を与えた『ギア・デ・ペカドレス』について言及している。ルイス・デ・グラナダは、スペインのドミニコ会士である。日本布教に従事したことはなかったが、彼の作品である『ギア・デ・ペカドレス』は、日本布教に大きな精神的影響を及ぼした。日本布教には、日本語の『ギア・デ・ペカドレス』が使用された。

ルイス・デ・グラナダは、スペインの重要な神学者であった。グラナダは、1525年に生まれた。彼の育った町で、ドミニコ会修道士となる宣誓を行った。その後、バリャドリードのサン・グレゴリオ学院で勉学に励んだ。ここで、バルトロメ・カランサ、メルチョル・カノと知り合うことになった。グラナダは、ラテン語、ポルトガル語、スペイン語で著述活動を行った。『聖職者のレトリック』は、ラテン語で書かれているが、厳格な雄弁術と俗的な話術を融合させた宣教師のための本である。この他、サン・フアン・カリマコの『精神の段階』やトマス・ケンピースの『キリストに倣いて』などの翻訳を行なった。

彼の著述の中でも『祈りと黙想のための本』（1554）は有名で、５つの祈りによる14の黙想の仕方について論じている。『ギア・デ・ペカドレス』（1556）は、人文主義的であり、完徳のための美徳の効用と禁欲主義の必要性を説いている。その他、『キリスト教義の要約』（1558）、『キリスト教徒の生活の記憶』（1566）などを著している。彼の『信仰への導き』（1582）も主要な著作である。この本の第１部では神の領域への高まり、第２部ではキリスト教信仰の賞賛、第３、４部では贖罪の神秘について触れている。彼は、古典主義、教父時代の影響を受け、反宗教改革の信仰心に貫き通されている。ルイス・デ・グラナダは、1588年にリスボンで没している[80]。

---

[77] Miguel Artola, Enciclopedia de Historia de España, pp.868-869.
[78]『福者ハシント・オルファネール　書簡・報告』、60ページ。
[79]『福者フランシスコ・モラーレス　書簡・報告』、131ページ。
[80] Miguel Artola, Enciclopedia de Historia de España, p.382.

それでは、日本人キリスト教徒の生活に影響を与えたルイス・デ・グラナダの作品を紹介してみたい。1615年３月28日、ハシント・オルファネル神父は次のように語っている。

「３人は創められていた信心会の家に住み、他の人々と一緒に「諸聖人の生涯」やフライ・ルイス・デ・グラナダの「ぎや・で・ぺかどれす」などを読んで、それによって互いに励まし合い神の命じ給うことの為に準備をしていました[81]。」

1619年３月15日に、同神父は、こう記録している。

「フライ・ルイス・デ・グラナダが言っているように、キリストの苦難はそのような人のためのものではなく、況んや、栄光はその人々のものではなりません。必要なのは神への奉仕のために決意と勇気をもっている人々です[82]。」

また、同神父は1619年10月25日にこうも記録している。

「この３人の聖なる殉教者はふだんルイス・デ・グラナダの「ぎあ・で・ぺかどる」（罪人の案内書）をよく読んでいました。ある友人（コスメ）がミゲルに「父上の渡した署名を何故それほど急いで取り消したのか[83]」と尋ねると「ルイス・デ・グラナダ神父の本で、今日神の与え給うた良い考えの実行を明日に延ばすな、ということを読んだからである」と答えました[84]。

オルファネール神父は、一人のキリスト教徒が「ぎあ・で・ぺかどる」を読んでから捕縛され、殉教を遂げたことを記録している。

「コスメは彼がなぜこのように急いでいるのかと不審に思って理由を尋ねると、ミゲルはこれに対して「昨日『ぎあ・で・ぺかどる』を読んでいると、ディオスへの回心を明日まで延ばしてはならぬという言葉があったからです。．．．．．この善きキリシタンたちはパードレ・ルイス・デ・グラナダの『ぎあ・で・ぺかどる』を家に所持していつも読むのが常で、妻のマクセンシアまで本書を読むことができたのである。このように翻訳された本書が日本で収めた偉大な成果は筆に尽くしがたいものがある。本書はキリシタンが尊重し読み耽るだけでなく、異教徒までは多数喜んで読み、一部の者は自宅に何冊か所持している[85]。」

---

[81]『福者ハシント・オルファネール　書簡・報告』、64ページ。
[82] 前掲書、93ページ。
[83] ミゲルが、迫害の時に棄教したという偽の署名。
[84] 前掲書、113ページ。
[85] オルファネール、『日本キリシタン教会史』、105-106ページ。

(7) 神学的知識の源泉

それでは、日本のドミニコ会士の神学的知識の源泉はどのにあったのであろうか？源泉を探ることにより、ドミニコ会士が日本に普及した神学的知識のもとを辿ることができるはずである。筆者は、スペインのサラマンカのサン・エステバン修道院とサラマンカ大学が神学的知識の源泉になったのではないかと推測する。この問題は、現在まで本格的に研究がなされてこなかった。なぜなら、日本に関する史料のみから日本ドミニコ会士の研究が行われてきたからである。また、日本のキリシタン研究が今までイエズス会を中心に進められて来た理由もあげられるであろう。このため、ドミニコ会の神学的知識に関して、スペインから日本への連続性を説いた研究は少ないのが現状である。この課題を研究する手始めとして、筆者は、サン・エステバン修道院とサラマンカ大学の神学とドミニコ会の日本布教の関係を簡潔に分析してみたい。

(a)サラマンカのドミニコ会士

ドミニコ修道会は、聖ドミンゴ・デ・グスマンにより1216年に創設された。1244年にはスペインのサラマンカまでその勢力範囲に置いた。サラマンカのトルメス川の辺にあるサン・フアン・デ・ブランコ教会に隣接して、修道院が建設された。1256年11月９日には、サラマンカの司教はサン・エステバンに捧げる小さな教会をドミニコ会に与えた。その後、修道士たちは、三身廊の教会と回廊のある修道院を建設した。13世紀の末に、この修道院が完成した。1299年には、スペインのドミニコ会の総合学院がそこに置かれることになった。

サン・エステバン修道院は、設立後、神学の中心地となっていく。サラマンカ大学では、法学が主として教授されていたが､14世紀に入って神学も教え続けられた｡枢機卿であるペドロ・デ・ルナ（ベネディクト13世）は、教皇使節としてサラマンカ大学を訪れた時から、神学部に４人の教授の任命が行われるようになった。４人の内、２名はドミニコ会から任命される規則があった。

サラマンカ大学、サン・エステバン修道院の神学は、17世紀にかけて大発展を遂げた。すでに14世紀の後半、15世紀の初めには、著名な神学者が登場した。フアン・デ・カステジャーノ修道士、ゴンサロ・デ・アルバ修道士（両者ともにサラマンカの司教)、フアン・ロペス・デ・サラマンカ修道士、ロペ・デ・バリエントス修道士、フアン・デ・トルケマーダ枢機卿、アルバロ・デ・オソリオ修道士らである。この時代に、ビセンテ・フェレールも修道院に住み、サラマンカの宣教を行なった。

15世紀には、黒死病の悪影響、修道院生活の退廃を克服し、サン・エステバン修道院は繁栄期を迎えた。特にディエゴ・デ・デサ修道士は特筆すべきである。彼は、コロンブスの保護者、王子フアンの教育係、パレンシア司教、セビージャの大司教も兼任した。彼がサカマンカにいた時に、コロンブスがサラマンカを訪ね、1486年からその翌年までサン・エステバン修道院に滞在した。サラマンカ大学の教授陣は、教授会議を開き、コロンブスを支援することにした。コロンブ

スは、晩年、彼の息子に、「新大陸発見には、ドミニコ会士が大いに助力を与えてくれた。」と語っている。

16世紀に、サラマンカ大学は、サン・エステバン修道院の傑出した神学者のお蔭で絶頂期を迎えた。教師陣の中で最も傑出した人物は、フランシスコ・デ・ビトリア（1483-1546）であった。彼は、サラマンカ学派の創立者で、国際法の唱道者、アメリカ大陸のインディオの人権を守った人物であった。彼は、インディオの人権のために『レレクシオネス』を書き上げた。ビトリアとともにドミニコ会の傑出した人物は、ドミンゴ・デ・ソト（1495-1560）であった。彼は、学識とともに、トレント公会議に参加した主要な聖職者であった。当時、サン・エステバン修道院出身の高名な聖職者は以下の通りである。フアン・アルバレス・デ・トレド枢機卿、メルチョル・カノ、フアン・デ・ラ・ペニャ、ベルトロメ・デ・カランサ(トレドの大司教)、ディエド・デ・チャベス、ペドロ・デ・ソトマヨール、バルトォメ・デ・メディナ、マンシオ・デ・コルプス・クリスティ、アントニオ・デ・オンチベロス、ドミンゴ・バニェス、ペドロ・ヘレーラ、フランシスコ・アラウホなどであった。

(b)サン・エステバン修道院と新大陸

サン・エステバン修道院の栄光に、アメリカ大陸、フィリピン布教への貢献が挙げられる。1509年、この修道院の修道士たちが、新天地アメリカの布教を担ったのであった。最初のドミニコ会士たちは、1510年９月の中旬にラ・エスパニョーラ島に到着した。アントン・モンテシーノ修道士は、1511年12月21日に、インディオの保護のための最初の説教―「彼らは人間ではないのか？」―を行なった。このグループに属したのが、バルトロメ・ラス・カサスであった。彼は、モンテシーノの説教により改宗した、サン・エステバン出身のドミニコ会士であった。

フィリピンの布教は少し遅れ、1565年に始まった。この島の最初の司教は、1578年に任命されたドミンゴ・デ・サラサルであった。彼もまたサン・エステバン修道院の出身者であった。16世紀の末には、フィリピンには100名以上のドミニコ会士が存在した。彼のうち30名以上は、サン・エステバン修道院出身者であった。アメリカ大陸と同じように、彼らの関心事は学問であった。1619年にはパウロ５世と1623年にはフェリペ４世が、新しいサント・トマス大学で学位を授与することを認可した。こうして、サント・トマス大学は東洋一のカトリックの中心地となっていくのであった[86]。

(c)サン・エステバン修道院出身のフィリピンでの司教たち

マニラ管区

[86] Lázaro Sastre Varas, Convento de San Esteban, Edilesa, León, p.2 y p.6.

ドミンゴ・デ・サラサル（1579-1594）、ギネス・デ・バリエントス（1680-1698）

ヌエヴァ・セゴビア管区

ペドロ・デ・メホラーダ（1717-1719）、ミゲル・ガルシーア（1766-1780）、フランシスコ・アルバン（1816-1837）

セブ司教区

フアン・ロペス（1662-1671）

サン・エステバン修道院から東洋に向かった聖職者の中から、フィリピンのみならず中国やヴェトナムの司教も輩出された[87]。

(d)サン・エステバン修道院出身の日本ドミニコ会士

歴史家であるドミニコ会士のフスト・クエルボは、サン・エステバン修道院出身で日本布教に従事した宣教師を研究している。

フアン・デ・サント・ドミンゴは、日本で殉教を遂げた。1586年にサン・エステバン修道院で請願式を行った[88]。

アロンソ・デ・メナは、アロンソ・ナバレテ修道士の従弟であった。1594年３月23日にサン・エステバン修道院で請願式を行った[89]。

ディエゴ・コジャードは、1605年７月29日にサン・エステバン修道院で請願式を行った[90]。

バルタサル・フォルトは、1586年５月２日にサン・エステバン修道院で請願式を行った[91]。

---

[87] José Luis Espinal, San Esteban de Salamanaca. Historia y Guía (Siglos XIII-XX), Editirial San Esteban, Salamanca, 1995, p.175.

[88] Justo Cuervo, Historiadores del Convento de San Esteban II, Convento de San Esteban, Salamanca, 1914-1915, p. 321.

[89] Ibídem, p.327.

[90] Ibídem, p.333.

[91] Ibídem, p.328.

アロンソ・デ・メナは、1594年３月23日にサン・エステバン修道院で請願式を行った[92]。

フアン・デ・サント・ドミンゴは、サラマンカ大学で学び、サン・エステバン修道院に何度も足を運んだ。1594年のクリスマスにサン・エステバン修道院で請願式を行った[93]。

このようにサラマンカのサン・エステバン修道院では、多くの日本ドミニコ会士が学び、請願式を行ったのであった。

(e)サラマンカ大学

アルフォンソ９世は、王国に中心的な学問地を創設しようと考え、1218年にサラマンカ大学を創設した。この大学は、スペインで最古の大学であると考えられている。最初の学問は、法律、教令集学、論理学、文法学、物理学、医学、臓器学、薬学、図書館学などから始まっている。サラマンカ大学は、パリ大学、オクスフォード大学、ボローニャ大学と並ぶ、ヨーロッパの初期大学であった。1254年には、アルフォンソ10世が、大学組織を規定し、大学の基金を提供した。1255年には、教皇アレハンドロ４世が、大学で授与される学位の有効性を認可し、特権を与えた。

新大陸発見後、サラマンカ大学は、初期のアメリカの大学の模範的存在となった。1451年以降、サラマンカ大学の伝統を引きながらアメリカに大学が建設されていった。15世から17世紀にかけて創立された大学の７割以上が、スペインのサラマンカ大学の精神的伝統を引くと考えられている。この時代には、サラマンカ大学はイベリア半島のみならず、ヨーロッパ各地、そしてアメリカ大陸からも多くの学生を引き寄せた[94]。先述した通り、16世紀には、サラマンカ大学にフランシスコ・デ・ビトリア（1483-1546）が現れ、サラマンカ学派を創立した。彼は、国際法の研究を行い、アメリカ大陸のインディオの人権を保護した。彼の思想は、ドミニコ会士にも大きな影響を与えた。その後、彼の思想を受け継いだ日本ドミニコ会士が日本人の人権を守るのに一役買うことになったのであった。

第３章　ドミニコ会宣教師の見た「日本の聖体行列」

カトリック教徒は、古来より聖週間を厳粛に祝って来た。スペインもその例外ではなく、聖週間は盛大に祝われが、この期間に聖体行列が行われる。天正少年使節団も、イタリアで幾つかの聖体行列に遭遇したという記録が残されている[95]。聖週間の聖体行列は、現在のヨーロッパでは

---

[92] Ibídem, p.346.

[93] Ibídem, p.373.

[94] サラマンカ大学公式 HP。サラマンカ大学の歴史。

[95] 大日本史料、第11編別巻之２、東京大学、1981、p. 17。

スペインで最も目立った行事となっている。17世紀にスペインから長崎にやってきたドミニコ会宣教師の記録のなかには、当時の長崎の町の中で、聖体行列が盛大に行われていたという幾つかの文章が見られる。本稿では、スペインにおける聖週間の聖体行列の歴史を簡潔にまとめ、その後、ドミニコ会宣教師の記録のなかから長崎の聖体行列に関する記述を抜出し、整理するものとする。最後にスペイン商人であるアビラ・ヒロンが描いた長崎の聖体行列を紹介してみたい。

⑴　聖週間と聖体行列

聖週間は、キリスト信仰の年中行事で最高潮を迎える時期である。〈枝の日曜日〉から〈キリストの復活〉までの期間とされる。聖週間のなかでも、木曜日、金曜日、土曜日が重要とされ、これらの日に、キリストの受難、死、復活、人類の救済が祝われる。初期教会の時代から、聖週間は大いなる情熱と深い思慮をもって祝われた。それは、黙想のための静けさだけでなく、キリストの受難や死の痛みの感情を表出させる機会となった[96]。

ユダヤ教徒の祭礼に遡るとされるこのキリスト教徒の行事に関する初めての記録となる人物は、メリトン・デ・サルデス（Melitón de Sardes）とセウド・ヒポリコ（Pseudo Hipólico）（２世紀）である。彼らは、キリスト教徒の集まりで、断食を行ない、キリストの磔をいとしみ、旧約聖書と新約聖書の一節を読み説いたのだった。ニケーヤ（325）公会議に聖週間の正確な日程が決定された。時間の流れとともに、キリストの受難の記念的な性格を帯びていくようになった[97]。

町々では、宗教的な儀礼としてより活動的で、肉体的な行事を作り上げようとした。すでに初期教会の時代から、ローマで〈四旬節〉が祝われ、祈りと悔悛の行列が行われ、その後、他の町々へと広がっていった。スペインでは、この習慣が特別に聖週間の儀礼へと発展していった。町の通りは寺院になぞられ、コフラディア（信心会）は、キリストの受難を象徴的に表す行列を行い始めた。この行列は、町の通りを練り歩くのであった。カスティーリャ、アンダルシアで聖週間の有名な行列は、グラナダ、セビージャ、ヴァジャドリード、サモラで行われるものであった[98]。

この他、ハエン、バエサ、プエンテ・ヘニル、カディスといったアンダルシアの町、トレド、クエンカといいたカスティーリャ・ラ・マンチャの町、ブルゴス、レオン、パレンシアといったカスティーリャ・レオンの町の行列も有名である。また、他の自治州では、ムルシアのカルタヘナ、サラゴサ、ヴァレンシアのガンディーア、エクストラマドゥーラのメリダなどの行列が有名である[99]。

---

[96] Quintín Aldea Vaquero, Diccionario de Historia Eclesiástica de España, C. S. I. C., Madrid, 1973, p. 2404.
[97] Gran Enciclopedia de España, 2003, p. 9710.
[98] Quintín Aldea Vaquero, Diccionario de Historia Eclesiástica de España, C. S. I. C., Madrid, 1973, p. 2405.
[99] Gran Enciclopedia de España, 2003, p. 9711.

スペインで最も美しいとされるバヴァドリードの聖週間の聖体行列（著者撮影）

⑵　ドミニコ会宣教師の記録に見る長崎の聖体行列

①　福者フランシスコ・モラーレスの報告

トクアンの秀れた忠告や熱意が大いに注目されたのは一六一四年に始まった迫害の時でありました。この迫害に於いて皇帝は教会の取り壊しと宣教師の日本退去を命じました。また他の土地で行なわれたように、長崎に於いてもキリシタンを棄教させるに違いないと考えられたので、暴虐者が来るまでの間に準備して、二つの重要なことが行なわれました。第一は贖罪のための全般的聖行列が催されたことであり、これにはあらゆる土地の人々が加わって、神の御前で血と涙を流し、皇帝の怒りを和らげることと、このような困難な時に彼らを見棄て給うことがないように神に祈り、たとえ生命を失うとも信仰は棄てまいということを誓いました。これには大きな反対がありましたが、トクアンの努力と説得によってこれが実行されたのであります。彼は神への奉仕となる諸行事をあらゆる人々に説いてまわり、彼自ら兄弟と共にこれらの聖行列に加わって人々を励ましました。代官の息子が自分の身の上に起こることを恐れずにこのような聖行事に加わったことは、すべての人々の立派な模範となりました[100]。

[100]『福者フランシスコ・モラーレス、書簡・報告』、キリシタン文化研究シリーズ７、202-203ページ。

② トーマス・デル・エスピリトゥ・サント・デ・スマラガの報告

一六一四年三月、スマラガ神父は日本在住の修道士によって管区長代理に選ばれた。その少しのち四月と五月に長崎で、著名な贖罪の聖行列がキリシタンによって行なわれた。「この時にフライ・トマース・デ・スマラガ神父によって為された説教はきわめて熱烈なものだった[101]。」

③ アロンソ・デ・メーナ報告

長崎の教会を取り毀すという彼の決定は数ヵ月前に解りました。（どの地方においても教会は取り壊されキリシタンは迫害され、多くの人達が俸禄や財産を奪われて追放されましたが、前述の理由によって長崎には手を付けないだろうと多くの人々が考えていました。しかし結局は彼の決意がすべてを破壊する事にあるのが解りました）。代官とその息子たちは〔奉行・左兵衛の心を〕和らげるように努力し、それが出来るかどうかを見る為に、教会を閉ざしできる限り悲しみを示せと命じました。しかしこれもその他の方法も〔左兵衛の心を〕和らげることができない事を知ると、〔当安は〕再び教会を開かせ、もはや地上には手段のない以上は天に救いを求める為にみな教会に集まれと命じました。（すべての事を実行すべき責任を負っている）左兵衛が命令されたことを執行する為に首都を出発しようとしている、という消息が入りました。その時キリシタンは断食・贖罪・祈りによってきわめて熱心に準備を始めました。とくに多くの人々が此処で或いはかしこで四十時間という信心行の祈りを捧げる為に集まりました。それだから此処で数日間この祈りが捧げられ、合計すると三千回以上になります。或る場合には同じ教会の中で公開された御聖体の前で行なわれましたが、そこには昼夜大勢の人が集まりました。これだけで満足せず、最も主だったキリシタンの中の或る人達は、神の御手に抱かれることを確実にする為につぐないの全般的聖なる行列を行なうのが良い、と考えてそれを計画しました。

とくに私たちのサント・ドミンゴ修院において計画が立てられて、それに修道士がよく参加しました。聖霊御降臨の祝日の二日目〔一六一四年五月十九日〕、最も壮厳・盛大な聖なる行列の一つが出ました。これは私の生涯で見たことも聞いたこともないものです。何故なら多くの人々が贖罪者は八千名以上だと言っているからです。少なく見つもる人々でも五千名と言っています。彼らの後から喪服を着た聖母の像が行き、さらにその後から五千人の女がついて行きました。彼女らはみな白い服を着てその上に足まで届く黒マントを着、それには同じ黒のベールがついていて頭を覆っていました。殆んど全部の女が頭上に茨とアルファ草の冠をかぶり、手にはろうそくを持ち、最も身分の高い者まで洗足で全員の先頭に立って行きました。行列の一番先頭に多数の

[101]『福者トーマス・デル・エスピリトゥサント・デ・スマラガ書簡・報告』、キリシタン文化研究会、1984、21ページ。

少年少女が加わり、これも同じくつぐないの服を着、キリストの像を中央にし、事態がきわめて緊迫して必要であったから深い信心を心に抱いて連禱を唱えながら行きました。

行列に参加している人々全員の流す涙と泣き声は信じ難いほどであって、修道士たちは途中ずっと心から神を求めてすがるように彼らを励まし続けました。ニニヴェの人々がしたようにこれほど真剣に神を呼び、神に近づく者を神は決して見棄てません。如何に罪人でありすでに刑が宣告されていても、結局は父である神は御手をかけ給い、悪人であっても子らの涙を見ては御心を和らげてその鞭を止め給うのです。またアカブに対し給うたことも同じであって、彼が邪悪で神を千回も威嚇し少しも改めなかったけれど、最後に示した僅かの謙虚だけで充分であり、それで神は予言者エリアに向かって、「アカブが、私のまえにへりくだっているのをみたか？かれが私のまえにへりくだっているのだから、私はかれの生存中には、わざわいをくだすまい」と言われたのです。この市のキリシタンはこのような手段をとりましたが、これは明らかに大きな利益をもたらし、この市の上に為し給うた神の御摂理が見られるのです。このほか数多の敬虔な聖なる行列が他の場所〔教会〕から出ました。とくにサン・アグスティン修道院から出たのは〔盛大でした[102]。〕

④　ハシント・オルファーネル報告

私たちは長崎に着きました。そこにはすでに日本中の宣教師が集まって来ていましたが身を匿して残った者も多数いました。それでキリシタンの歎きは大きく、聖い悲しみを抱きながら信心深い生活をし、自分たちが神父を奪われ狼の中に残された羊のようになることを考えて泣きながら、聖い悲しみと信心を抱いて生活していました。彼らは神の怒りを宥めるため、また日本から追放されないように神父たちを守り、迫害に対する力を彼らに与え給うように援けを求めて、きわめて壮厳で信心深い聖行列を行ないました。それらのうちで聖霊御降臨の祝日の翌日、五月十九日にドミニコ会の修道院から出た聖行列は非常に壮厳で信心深いものでした。この行列に参加して血の贈罪を行なった者の数は一万にのぼったと言われています。またその時機に種々の特別なつぐないの聖行列が出ました。これらの信心の催しにとくにトマース・デ・スマラガ神父がよく参加して、説教と熱意でキリシタンを励ましました。また私たちの教会では当番による連続の祈りと共に御聖体が二度顕示されました[103]。

[102]『福者アロンソ・デ・メーナ、書簡・報告』、144-146ページ。
[103]『福者ハシント・オルファーネル、書簡・報告』、109-110ページ。

⑤　オルファーネル『日本キリシタン教会史』報告

諸修道会も盛大な荘厳と信心のうちに行列を催した。最初は五月九日、聖霊降誕祭の翌日に修道院から出たドミニコ会の行列であった。行列の先頭には侍者を従えた十字架が進承、次の二列には白衣をまとった同宿が連祷を歌う大勢の少年と共に続き、その後には同じく二列で二千人以上の女性が続いた。この中には市の最も身分高く、富裕、高貴な女性が大勢いた。彼女たちはいずれも跣足で、上には白い外被を着、頭には胴まで達する黒いベールを被り、荊の冠を頂き、全員が十字架のキリスト像や十字架あるいは聖像を手にした。その後には八千人以上の鮮血にまみれた贖罪者が続き、贖罪者の間には燃える蝋燭を手にした一人の白衣の男が歩き、その後には修道会士たちが祈りつつ行った。それから黒いベールで覆われた極めて大きな神々しい十字架上のキリスト像が続いた。この行列には当安が子息全員を連れて従い、他にも参加した人々は無数であった。翌日の聖霊降誕祭の三日目には、聖アグスティン会の行列が出たが、これも極めて荘厳であった。つづいて御聖体の大祝日にはイエズス会の行列が出た。フランシスコ会パードレたちは既に四月下旬に行列を催していたが、荘厳さに溢れた行列ではなく、見事な贖罪と苦行を伴うものであった。この行列がのちに日本人の行列の模範となった[104]。この頃、聖ドミニコ会で四十時間連続の祈祷信心が二度聖体顕示式中に行われた。同じことはイエズス会でも行われた。キリシタンは修道会士が乗船するまでに要した何ヵ月かを、このような心霊修業と秘蹟にしばしば与ることに費やした。各地では、殿のキリシタン迫害は程度の差こそあれ決して中止されることはなかった。かくして当時、豊前の殿・越中殿 Yechundono〔細川忠興〕は公然とキリシタンを迫害し、

バヴァドリードの聖週間の聖体行列（著者撮影）

[104] フランシスコ会パードレの行列は聖木曜日であった。最初フランシスコ会パードレだけが参加したが、のちに他派修道会士やキリシタンも加わり移しい群集になるまで人数が増加した。DRVB, pp. 7-10. 佐久間正訳、27-30ページ。

寵臣ドン・ディエゴ隼人をふたたび苦しめたが、しかし徒労に終った[105]。

⑶　アビラ・ヒロンの見た長崎の聖体行列

上記のドミニコ会の記録から、長崎の町では、1614年５月19日に聖体行列が行われたことは明らかである。この聖体行列の様子は、スペイン人商人アビラ・ヒロンが彼の著書『日本王国記』の第18章第４節にて「長崎で行われた公の贖罪と聖行列」として記録されている[106]。この記述を読めば、上記のドミニコ会の聖体行列の記録がより理解できる。それでは、この章では、アビラ・ヒロンの見た長崎の聖体行列を紹介してみたい。

「一六一四年五月の初めから、左兵衛（長崎奉行長谷川）は等安のもとへ手紙をしきりに送ってよこし、修道士たちへの脅迫の言葉をかき連ね、何が何でも十月には乗船させねばならぬとか、石一つ残らぬよう寺はすべてとりこわさねばならぬとか、その他にもパードレたちのいやがりそうに思えることをいろいろと書きたてた。その上、キリシタンに対しては、拷問にかけて殺し滅ぼさねばならぬとか、左兵衛が全員背教させてみせると申し出たなどという情報が伝わった。キリシタンたちはこれを名誉と考え、いくつかの組に分かれて修道し、一致団結し、自分らの名前を署名し、与えられる苦難、動揺せしめる逆境、加えられる辱しめによっても信仰を捨てぬと約束した。優しい婦人やいとけない子供たちまでが、たくましい男たちにかわらぬ勇気と熱をもってこれに加わったのは特筆すべきことであった。これがすむと、彼らは昼夜を分かたず行列を行ない、長崎の通りで公然と厳しい苦行に励み、約束を果たすための勇気と力と御憐れみと罪の許しを主に乞いはじめた。

第一の聖行列は五月九日金曜日の夜行なわれ、男女三百人以上の血の贖罪者が参加した。この行列はこの市のすべての天主堂をねり歩いたが、何人も責縄苦行をしてはならぬ、これをなした者は重罪にとわれるというこのあいだの四旬節に出たお触れを守って行なわれた。

翌土曜日の夜もたくさんの苦行者があったが、五月十二日、月曜日、諸聖人天主堂から荘厳な行列が出た。三千人以上の男女が加わっていたが、ある者は血の贖罪をなし、ある者は十字架を負い、ある者は十字架をかたどって、両腕を肩にかついだ長い木の枠にしっかりとしばりつけていた。また、ある者は大きな石を汗や首に負い、ある者は口にさるぐつわをつけ、身体には鎖を堅く巻きつけていた。多数の者が俵を身につけて太縄で強くしばっていた。ある者は足の先から首まで荒縄でしっかりしばっていた。また大勢の者が両腕を後に強くしばりあげ、首に太縄をつけ、他の者がそれを引っぱっていた。また裸の背を責縄や先を細く裂いた竹の鞭で打つ者もいた。また中には体や腕を強くしばったのち、びくのような竹の籠を負い、さらに縄で身体をしばる者

[105] オルファーネル『日本キリシタン教会史』、96-97ページ。
[106] アビラ・ヒロン『日本王国記』、大航海叢書 XI，1965、412-421ページ。

もいた。優しくか弱い女たちは両手を後に、あるいは首をしばり、互いに鞭で打ちあった。しばられた両手に持つ聖画像やキリスト像に、敬虔なまなざしを注ぐ女もいた。その他の苦行を行なう贖罪者たちもいて、信仰をふるいたたせるとともにあわれをさそった。キリシタンたちがこれらの十字架、俵、びくなどの道具を持ち、縄を身に巻き、ある者は手を堅くしばられ、のこぎり、十字架、聖旗などを高くかかげてこの行列に加わったのは、時ならずして偶然に行なわれたものではない。これは暴虐者たちの脅迫や、都や大坂で恐ろしい勢いで行なわれはじめたキリシタン迫害にこたえてなされたものであった。つまり、もしキリシタンだからといってわれわれを迫害し苦しめねばならないなら、そらここにその道具がありますよ、われわれは勿論これらの道具を抱きしめ崇め接吻するのです、われわれは信仰のために捧げる生命を棄てる力を与え給うわれらの主なる神を信じるのです、というかのようであった。

五月十四日水曜日の昼間、七つの行列が行なわれた。ことに一つの行列では、男女とも身分の高い人々が多く、千人以上の贖罪者が参加した。等安の妻ジュスタも、はだしで茨の冠をかぶり、両腕を後にまわし力こぶのあたりをしばり、しばられた手に十字架を持って行列の中にいた。二人の娘、五人の息子も同じような姿で参加していた。この聖行列は洗者サン・ジェアン〔ヨハネ〕天主堂を出て、私の家の前を通り、サンタ・マリア天主堂へ向かった。先頭に大きな杉板をつけた棒をかかげていたが、そこにはその行列を準備し参加した者の名前が記され、「われらは弱く、罪人ゆえ、己が罪を贖い、侮辱申した主への信仰のために、一致して死ねるよう我らの主なる神にご恩寵を乞うものである。主のために生命を棄てることをご恩寵によりて誓い奉る」とかかれていた。その後から大きな十字架が来たが、血痕のように赤く染められた聖骸布がつけられていた。キリスト像がそれに続き、大勢の子供や娘たちが連祷を唱えながら進んだ。この行列は、サンタ・マリア天主堂からサンタ・クルス〔天主堂あるいは墓地か〕へ、そこからサント・ドミンゴ天主堂へ、サン・フランシスコ天主堂の前を通って慈恵院を過ぎ、イエズス会の天主堂へ、そこからサン・アグスティン天主堂、ついでサン・アントニオ天主堂、そこからサン・ペドロ天主堂へ向かい、それからサン・ジョアン天主堂へ引き上げた。この日のできごとは信仰をふるいたたせ憐れみをさそうものであった。昼から夜にかけて一万人以上もの贖罪者が出たが、その中にはキリシタンであってもまだ何が罪であり、何が良心にたずねてしてはならぬことかが分からぬ者が多くあったので、数々の過ちに陥ることになったのである。ある人は両手両腕をしっかりしばらせ、先ず股に刀を刺して全身をがんじがらめにして行列に加わった。サント・ドミンゴ天主堂に着くと、人々はパードレ・トマス・デル・エスピリト・サント師にこのことを告げたので、パードレは刀を抜かせた。この人はこれは罪ではなく神の喜び給う贖罪になろうと考えたといった。彼は翌日に『他にも三四人この苦行のため死ぬ者が出た。パードレたちは彼らにしてはならぬこと、より正当なことを再び教え忠告した。ついで同十五日木曜日昼間、三つ行列が行なわれ、多くの血の贖罪者、その他の方法による贖罪者が加わった。金曜日は昼に三つ夜一つ行列が出、土曜日も五百人以上もいたぐらいだから、贖罪者があとをたたなかった。

月曜日、聖霊降臨祭の二日目、サント・ドミンゴ天主堂から男女三千人以上の血の贖罪者の荘

厳な行列が出た。彼らはかつて見たこともないほどむごたらしく互いに鞭打っていた。二千人以上の長崎の最も名誉ある富裕な身分の高い家の婦人たちがみられ、はだしで純白の帷子や外套をまとい、黒のベールやマントで頭や上半身を包み、手には十字架上のキリスト像やその他の聖画像を持ち、頭には針や釘で作った冠をかぶっていた。等安は子供たち全員を連れてこの行列に従った。

行列はサン・フランシスコ天主堂の入口の前を次の順序で通った。先頭に見事な金色の銅製の十字架を高々とかかげ、大勢の少年たちが連禱を唱えながら進み、その後から中くらいの大きさの十字架が行き、間をおいて十字架がいくつか続いた。最後に黒のベールにおおわれた大きなキリスト像と、喪布におおわれた台に載った聖母マリア像が行った。その後からドミニコ会、アウグスチノ会、フランシンスコ会の修道士たちが連禱を唱えながら歩いた。アウグスチノ会の修道院長エルナンド・デ・サン・ホセ師はマントをまとっていたが、その傍に等安とその子供たちがいた。行列は慈恵院の入口の前を通ってイエズス会の天主堂へ向かい、そこからサン・ペドロ天主堂へ、サン・ペドロ天主堂からサン・ジュアン天主堂、サンタ・マリア天主堂へ向かい、サンタ・クルスを通って出発点に戻った。

火曜日、五月二十日、サン・アグスティン天主堂から血と十字架の行列が出た。紫色の外被を着た男女四八四人の苦行者たちは十字架を手にしていた。血の贖罪者は千人以上おり、血を流さぬ責縄の苦行者たちは五百人いたが、しかし彼らも大量の血を流した。この行列はドミニコ会の行列より整然と行なわれ賞賛をあびた。そのため、いつもより多数の修道士たち、ことにイエズス会の修道士が六人加わっていた。まず高い十字架が進み、血の贖罪者と血を流さぬ責縄の苦行者たちが続いた。その後から一人の男がトランペットを巧みに奏しながら行き、紫色の絹の旗がそれを追った。多くの少年たちが紫色の着物をまとい十字架を背に背負ってそれに続き、十字架を持った女たち、非常に美しく飾られたご受難の旗を持った四人の小天使の順でその後を進んだ。最後にナザレのキリストが十字架を負い、非常に敬虚な感じのすばらしい紫色の、光沢の強い紺の衣をまとい、男たちがかついだ台に載せられて行った。その前に、八本の燭台が燃え、三人の祭礼服をつけたパードレがその後を進んだ。一人は等安の息子の司祭、パードレ・フランシスコで、合羽をまとい、両手で多くの聖遺骨をおさめた銀の聖遺骨箱をかかえていた。彼らは調子の高い声で連禱を唱え、その傍を等安が進んだ。その後にナザレ人姿の人々が十字架を背負って行ったが、その数は前を行く人共と大差なかった。聖母マリアが喪布に包まれた台にのってその後を行き、四本の蠅台がその前に輝いていた。これとともにわれわれはおびただしいろうそくを手にして加わり、その後から大勢の同宿と残りのパードレたちが続いた。その中の三人は合羽をまとい、中央のイエズス会のパードレ・ペドロ・パプロは両手に多くの聖遺骨の入った聖く尊い十字架を持っていた。これはこの王国のイエズス会のパードレたちの有する最高の十字架である。等安の息子たちは多数の人々を率いてこれとともに進んだ。行列の通るすべての道には祭壇や祈祷所、聖画像な一面にかかっていた。ただし、あとに述べる四つの道は別である。

この行列は古川町とよばれる通りに正面の入口が面しているサン・アグスティン天主堂を出る

と、河にかかった橋を渡り、本紺屋町に入り、慈恵院の後をまわって通りに出て、その入口を通りぬけて島原町を過ぎ、その後まっすぐに分知町に向かった。そしてサン・ペドロ天主堂の前の広場に出、小門から入って正門から出、外浦町に入った。サン・ペドロ天主堂では、祭礼服をつけた三人のパードレが待ちうけていて、行列の行く前に鐘を鳴らし拍手して迎えた。行列は外浦町から大村町に入った。これらの四つの町には聖画像もかけられていず、敬虔な喜びをもって行列を迎える様子もなかった。ここは長崎でも最も古く由緒ある町で、住民は身分ある富裕な人々であるが、この市の並だった奉行たちが住んでいるので、キリシタン宗のことどもにあえて公に好意をみせようとは誰もしないからであった。大村町から本博多町を経て行列は興善町に至り、豊後町を通って小川町に下り、上町に入ってサンタ・マリア天主堂に着き、一方の扉から入ってもう一方の扉をぬけ、サント・ドミンゴ天主堂に向かった。そこからサン・フランシスコ天主堂の入口の前を通り、新しか紺屋町に入り、サン・アントニオ天主堂のある大工町を通過し、その墓地を経て魚町に出、再び横町を通って本紺屋町に至り、そこからサン・アグスティン天主堂へ行った。行列は午後二時半に出て六時に戻った。行列に従った人の数はおびただしかったが、通りの入口や家々の戸口や窓や屋根の上にいた人々は五万人以上の数にのぼった。聖行列はあらゆる人々にとって喜びであり、憧れのまとであった。行列が成功したか否かについては、イエズス会のパードレたちの気に入ったということ以外に私は知らない。

五月二十九日、木曜日、聖体の祝日の日、イエズス会において、荘厳で、かつ日本人にとっては非常に権威ある行列が行なわれた。多数の人が参加したが、まず五十人の日本人の少年たちが手にろうそくを持ち、豪華な身なりで先頭に立ち、その後をパードレになるために勉強をしている二一六人の日本人のエルマーノ、同宿が手にろうそくを持ち、短白衣を着て進んだ。四人の美しい豪華に着飾った天使がそれに続き、たくさんの鎖や琥珀入りの香箱や、聖遺物棺や、さまざまの宝石の下った金色の台が、大そう美しい幼な子イエズスをのせて、その後から行った。その前を火の灯った八本の燭台が行き、合唱隊がそれに従った。五十数人のイエズス会のパードレたちが、短白衣と襟垂をつけてその後を歩いていたが、二十人は合羽を着ていた。それから大きな聖旗が進んだ。一面には聖餅の入っ聖盃が、反対側の一面には、薪木といけにえ台の上におかれた謙虚なイサクの上に新月刀をふりあげている尊いアブラアムが描かれていた。この旗は深紅の緞子の外衣を着た誠実なポルトガル人が持っていた。その後に手にろうそくをもった四人の天使が続き、その前をもう一つの合唱隊が進んだ。また赤く塗った高燭台の上に十二の燭台がのせられていた。その一つ一つには受台として金色の真鍮の美しい薔薇の花がついていて、薔薇の約一パルモ下には金のイエズスがついていた。これらを持った人々をも深紅の衣をまとっていた。その後から見事な細工を施した豪華で大きな金の聖体顕示台にのせられた聖体が進んだ。管区長バードレ・バレンティン・カルヴーリョが緞子を裏うちした小さい板の台にこれをのせて持ち、助祭と副助祭が各々両側に立ってを助けていたから、三人は端正で楽な姿勢で歩いた。聖体は縫いとりをしたびろうどの美しく高価な天蓋におおわれ、八本の枠で運ばれていた。町の最も身分の高い人々も深紅の外衣をまとっていた。

行列の歩き廻った距離は極く短いものだったが、それは町の年寄らが、あの悪魔のような敵がこの上怒らないように、パードレたちに行列を通りへ進ませないでくれと頼んだからであった。何しろあの敵に対しては、キリシタンらは今にも自分たちを所払いすることになりはしないかと待っていたのである。このため行列は天主堂の広場より外へ出なかった。黒山のような人だかりで、天主堂も、中庭も、広場も、人波をかきわけて進むことができぬほどだった。天主堂へ通じる三つの通りも人波にうずめられた。ご聖体のキリストはもとの場所に戻され、三日間公に顕示されていた。その日、慈恵院や使徒サンティアゴのエルマーノたちが集まり、厳かな行列をなして前にのべたように顕示されていた主を拝みにサン・パプロ天主堂へ向かった。彼らはまる一時間そこで祈祷を捧げ、再び整然と引き揚げた。

なぜなら日曜日を除いて、その他は毎日、非常な熱烈さで、多くの人々の鞭打ちの苦行が行なわれたが、これはわれらが主への感謝を捧げるためであって、神への愛のために一致して苦難に耐えるために、寄り集まって断食を行なった。この期間を通じて、人々は四十時間の祈りを絶えず行ない、それが行なわれない日は一日としてなかった。多くの個人の住宅で、いとも敬虚に、ひそやかに祈祷が行なわれたが、こういう祈祷に人々の人数が欠けないようにと、町の住民らは順番にそれを引き受け、人目にたたない、清らかな、ちゃんとした場所に、きちんと法式通りの祭壇をしつらえていたが、これは私たちを少なからず当惑させることになった。それというのも、罪深い私たちは、しばしば述べたように、すっかり習慣的になってしまっているものだから、平日にはほとんど一日もミサに行くことはなく、天主堂で定められた日にミサを拝聴に行くのさえようやくのことで、それでもし司祭がミサを早々に切りあげなかったりすると、だれかも言ったように、狩人のミサ〔早朝のミサ〕をもとめて、司祭から逃げ出すために、合図をしたりしたものだからである。」

結　　論

第１章

ドミニコ会がやって来た頃の日本は、天下統一が終焉を迎え、徳川幕府が成立していった時代であった。日本人の間に厳しい封建制身分が確立されていった時期に当たる。この時代に日本に到来したドミニコ会宣教師は、一般的に「日本人を親切である」と評しているが、一方、「残酷である」との意見もみられた。この見解は日本の引き起こした諸戦争を振り返れば、正鵠を得ていると思われる。日本人は、大変親切であるが、残酷な一面も持ち合わせている。早くも17世紀のドミニコ会宣教師は、日本人の本質を見抜いていたようである。

ドミニコ会宣教師の目には、日本人とキリシタンはしっかりした宗教心を有していると映った。しかし、仏教という宗教は偽善的で、信者たちは偶像崇拝を行なっていると判断した。さらにドミニコ会宣教師は、仏教の宗派やその教えを謙虚に観察し、山伏などにも注目している。また彼らは、織田信長、豊臣秀吉といった戦国大名の性格もつぶさに観察している。日本の戦国大名は、

ドミニコ会宣教師が、民衆を改宗させるためにも必要な存在であった。同時に、九州の戦国大名たちが、貿易に大変興味ももっていることも理解していた。

反対にドミニコ会宣教師は、日本人の目にはどう映ったのであろうか？日本人たちの中には、ドミニコ会宣教師を人徳的に優れた人たちであると考え、歓迎した者たちもあった。しかしながら、キリシタン迫害、厳しい禁教政策が開始されるなかで、多くの日本人達は、ドミニコ会士を家畜、悪魔の長、征服者とみなす捉えた者も現れた。しかし、次第にドミニコ会士の人徳溢れる人間性を褒め称える日本も多く現れてきたことは、いかにドミニコ会宣教師の人間性が優れていたのかを物語っている。

第２章

今まで、日本ドミニコ会宣教師の文化的活動を分析してきた。日本ドミニコ会宣教師は、日本の文化や風習に適応しながら、この地に学問的影響を与えて行ったことが明らかとなった。彼らの行った著述活動は驚くべきものがある。厳しい迫害の下で、ディエゴ・コジャード、ディエゴ・アドゥアルテ、アォンソ・メナ、ハシント・オルファネールらがマニラの聖ロザリオ管区に日本の布教状況を書き送ったのであった。幾人かの宣教師は、大村の鈴田牢に投獄されながらも著述活動を続けた。

また、日本ドミニコ会宣教師は、日本人伝道士、日本人修道女の育成を熱心に行っている。当時の日本は、豊臣政権から徳川幕府が確立され、江戸時代を通じ存続する強固な封建的身分制後が確立されていく時期に当たる。こうした政治、社会状況を鑑みると、日本人伝道士、日本人修道女がドミニコ会宣教師によって育成されたことは驚くべき事実である。日本ドミニコ会は、スペインのサン・エステバン修道院、サラマンカ学派の神学的影響を受けていたことも間違いない。サラマンカ大学のドミニコ会士であるフランシスコ・デ・ビトリアの思想的影響を受けていたことも明らかであろう。このスペインから日本への思想的影響の分析は、今後の筆者の大きな研究課題である。

第３章

以上、ドミニコ会宣教師とスペイン人商人アビラ・ヒロンの記録から、1614年５月19日、長崎では、この町で活動していた宣教師、そして長崎のキリシタンを中心に聖体行列が行われていたことが明らかになった。聖週間の聖体行列は、初期キリスト教会からの遺風であり、特に中世以後、スペインを中心に行われた行事であった。勿論、聖週間の聖体行列は、ポルトガル王国にも見られ、イエズス会による日本布教の初期的段階から見られれたものである。しかし、スペインでは王国の宗教政策により、聖週間の聖体行列は深く王国にカトリックの習慣として根付いていった。現在では、この聖週間の聖体行列を最も盛大に行っているのはスペインのみである。17世紀初めは、長崎でスペイン系托鉢修道会（ドミニコ会、フランシスコ会、アウグスティーノ会）が活発に布教に従事したという事実を鑑みるに、1614年の聖体行列は、スペインからの伝統の影

響も確実に見られると考えられよう。このように長崎の町に、スペイン中世期の精神的伝播が見られたのである。

（2018年10月 1 日　受理）